九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ルソーをめぐる読解のトポロジー

阿尾, 安泰
九州大学大学院言語文化研究院

https://doi.org/10.15017/8769

出版情報：Stella. 21, pp.87-97, 2002-12-20. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

ルソーをめぐる読解のトポロジー（1）

阿　尾　安　泰

はじめに：ふたつの方向

日々新たな解釈が加えられていくかに見えるルソー作品を前にして，従来の成果を無視して建設的な事が行えるとは思えない。とはいえ機械的にこれまでの研究を反復することで満足できるわけはない。そこに研究の難しさがあり，アプローチに自己言及的な色彩が入ってくる。この小論においても，ルソーをめぐる問題がいかなるコンテクストのもとに成立してくるのか，諸課題を提起する場をそれを支える条件群の考察とともに追求してみたい。

具体的には「異者」としてのルソーというテーマである。異質性と同質性を隔てる境界線のとらえ方をめぐっては，ふたつの方向がある。可視的境界線と不可視の境界線である。前者は差別されるべき項の特殊性を際だたせるとともに，その項が区別さるべき根拠を間接的に正当化する。逆に言えば，その差別化が正当化されるに及んで，異質な項は全体との関係の中で，それなりに自己の位置を確定し，体系を支えていくことになるわけである。また一方に不可視の境界線がある。本来は区別さるべき根拠があるはずなのに，意識的，無意識的を問わず分別の必要性が隠蔽されることで，いわば偽りの同質性が形成されていく。差異の抑圧を通じて，全体はある調和を形づくることになる。このふたつの方向はつまるところ，体系に還元しがたいものを全体の中に安定した形で封じこめるという目的において合致する。

我々がこの小論において目指すのは，可視的境界線の問題である。ルソーの作品をこうした取り込みの過程から引き離し，一体化とは違う形で，テクストとそれを包囲しようとする場との関係を考えることである。

１．アリバイとしての境界線：レトリック

ルソーほど執筆活動の当初からそのレトリック性が強調されてきた作家はい

なかった。処女作の『学問芸術論』も数多くの批判を巻き起こした。その主張の内容が問題を引き起こす一方で，書き方が人々の注目を集めたことも否定しがたい。つまりルソーはパラドックスを多用する作家であり，レトリックに凝った書き方をする者だというのである。そのイメージから，シニックな見方をとる思想家，ひねくれた考えを提示する著作家という人物像が生まれた。

そうした見解はルソーとは直接の面識のない読者たちの間にも無意識のうちに共有されていったように思われる。たとえばジュネーブの知識人階級に属すると思われる法曹家のジャン＝ルイ・デュ・パンは友人あて書簡で次のように書いている——

〔…〕おそらくジュネーブのルソーという者の作品をご存じだと思います。この者は我々を野蛮人のように生活させたいと思っているのです。パリではその才能ゆえに評価されていますが，その変わった見解，シニックな生き方から批判されてもいるのです。[1)]

ここでは，異者としてのルソー像が明解である。思想の独創性は，彼の生き方の異端性と結びついている。逆に言うと，その思想は彼の外部性と引き替えに受け入れられている。彼の考えるところは，奇矯性を前提としたうえで，了解できるように思われる。たとえばルソーが発表した『ダランベール氏への手紙』を，デュ・パンは以下のように位置づける——

私は繰り返しルソーの作品を読んでみました。演劇一般についてはもっともなことがたくさん書かれていました。ただ残念なのは，彼は感情面で行き過ぎなところがあって，この著作に幼稚な点や不必要な事柄，矛盾が数多く入ってきてしまったことです。[2)]

思想の独自性は性格の不完全性と対照をなしている。いわば不完全性を代償として，人質として提示することで，その思考が受け入れられるかのようである。そうしたバランス感覚を持つのは，デュ・パンひとりではない。ルソーの『ダランベール氏への手紙』についてグリムが下す評価がそのことを裏づける——

〔…〕ルソー氏は生まれつき詭弁家の才能がある。もっともらしい議論をし，巧みな理論を山と積み上げ，技巧に技巧を凝らしながら，力強く，簡潔で胸を打つ雄弁さをそこに結びつけることで，ルソー氏は彼を攻撃するものにとって実に恐るべき敵となっ

ている。しかしながら，彼がいかに魅惑的に書こうとも，彼が読む者を説得することはない。というのも人々を納得させるのは真実だけだからである。読者はいつもこう思ってしまう。これはとても見事だ，でもとても真実とは思えない。ここで問題となっているルソー氏の作品〔『ダランベール氏への手紙』〕〔…〕を読者が喜んで読むことを私は疑うものではないが，読み終えてから，読む前と自分の感情が全然変わっていないことに読者の方は驚くであろう。[3)]

ルソーの作品と作者たるルソーとを区別したうえで，その 2 項関係を前提として評価を行おうとしている。ルソーという存在をそのままの形で共同体の体系の中に収めるのは難しいのである。入れ込もうとすれば，共同体そのものが変わらざるを得ないわけであり，それを避けるために仕掛けを必要とする。レトリックというのもそうした試みのひとつに他ならない。レトリックとは効果を調節するものである。つまり命題の提示の仕方を変えることで，伝わる効果を操作していく技術である。命題の内容にかかわるというよりは，その効果の方に重点を置いていく。内容の同質性を前提としたうえでの，表現の多様性を追求していく姿勢がそこにはある。そうした観点からすれば，ルソーの異質性は最終的には，同質なるものに還元されていくことになる。言い方が違うだけで，内容的には新しいところはないということに帰着するのであり，表面的な奇矯さは根底的な同質性を揺るがすことはない。それこそが人々の行うルソー解釈である。たとえば，マルモンテルの話を聞いて，ヴォルテールは首尾一貫したルソー像を見いだしたとして安心する――

「〔…〕そうだろう。この男は頭のてっぺんからつま先まで，嘘で固まっているのだ。心も精神もそうだ。いくらストア派や犬儒派を気取っても無駄なことだ。すぐに化けの皮がはがれ，偽りの仮面で息が詰まってしまうだろう」[4)]

仮面を剥いだところに，ルソーの素顔を見ようとしている。更にその素顔は決して怪物の姿ではなく，普通の人と変わらないというわけである。この仮面こそレトリックに他ならない。

ここで指摘すべきは，巧妙な取り込みの過程である。最終的にはルソーの著作が孕んでいた異質性は除去されることになる。つまりルソーの突きつける外部性は形式の問題であり，その中にくるまれているはずの内容は，人々の考えているところとそれほど変わらないというのである。ルソーは人目を引きたが

る一種の変わり者であるが，その偏差を許容してしまえば，後は大した事はないという見通しが開ける。こうしてルソーの著作はそのずれがすべて形式的なレベルに還元されることで，無害なものとして人々の間に取り込まれる。仮面の下には，皆と同じ顔があるはずだという思いこみが，暗黙のうちに共有されている。ここではルソーを読者たちから引き離すと思われた距離は，実は思ったほどのものではなく，むしろ踏破への欲望を促進し，最終的にはルソーを人々の手の中に収めるという見取り図を提供することになる。距離はそうした解釈を促す仕組みのひとつに他ならない。ルソーを人々と分かつ境界線はかりそめのものにすぎない。その差異は 2 次的なものとされ，むしろ本質的同質性は確保されたように思われる。

2．境界線の押しつけ：陰謀

レトリックの場合，境界線による差異化は最終的には同質性を確認しようとする安全装置であり，意識的同質化の過程ともいえる。これに対し，無意識的な同質化のプロセスを考えてみたい。ルソーと人々を隔てる分断の線が最後まで残るかに見える状況の中に，その分断そのものが時代が提示する読みとりの枠組みの相似性そのものを示すのである。ルソーの妄想の場合を考えてみよう。レトリックと違って妄想の場合，断絶は決定的なように思われる。しかし「狂者」ルソーに注ぐ視線は，さながら鏡のように彼を見る者自らが持つ思考の構造を映し出す。もちろんそれは人々の意識に上ることはない。その問題をこれから考えていこう。

2－1．狂者ルソー

晩年のルソーの被害妄想的な状況は同時代人の言葉からも知ることができる。たとえばメルシエは，ルソーが「あまりにも強烈な想像力に動かされ，彼自身も自覚していなかった自尊心でいっぱいになっていたので，自分の周囲に巧妙な敵の同盟がはりめぐらされていると思いこんでいた」[5]と証言している。ルソーの周りには不特定の集団から形成される陰謀組織が存在するというのである。

本論では陰謀の存在自体を考察するよりも，まずルソーの陰謀に対する解釈を見ていこう。ルソーの疑惑は，自分の原稿のある部分の紛失に気づくことか

らはじまる。そしてその理由を考えていくうちに，これまで別々に捉えてきた事件が，ルソーにとってはある連関のもとに結ばれてくる。ショワズールから交付されたパスポートに添えられた不思議な手紙と紛失した書類の時期から判断すると，ルソーをダミヤン事件の共犯者に仕立て上げる陰謀が推測できるというのである[6)]。

このビジョンを今日的な見方から考えれば，自分をショワズールそしてダミヤンと結びつける誇大妄想的な傾向がたやすく指摘できよう。そしてルソーを犯罪者としてみる一派の策動は彼を稀代の毒殺魔，殺人鬼として位置づけ，事件の犯人にしたて上げる計画が立てられているという。あるいはこの老思想家を生きたまま埋葬してしまう計略もあるとされる[7)]。ただこの小論では，ルソーの見方に性急に精神病理学的判断を下すのを控えながら，彼の時代に即して考えてみたい。18 世紀がいかなる時代であったのか，ダミヤンが刃を向けるルイ 15 世とはどんな王であったのか，またダミヤン事件はその後いかなる波紋を呼んでいったのかを追求してみたい。

2－2．18 世紀という時代

18 世紀というと啓蒙の世紀を思い浮かべ，理性があまねく支配した光の空間を想定する場合が多いが，それは現実の 18 世紀フランス社会の一面でしかない。もちろん闇の時代とは言わないまでも，光は闇と混在してこの時代の文化空間の中に存在している[8)]。ダミヤン事件に至るまでの，18 世紀前半のフランス社会を彩るふたつの事件を考えておこう。痙攣派事件とパリ人民暴動事件である。

前者は 18 世紀の初期，サン＝メダール墓地に埋葬されたジャンセニスト派の副司祭フランソワ・ド・パリによって奇蹟が得られるという噂から始まった。これを聞きつけてこの墓地には大勢の群衆が訪れ，その中には宗教的な陶酔から痙攣や引きつけをおこして，その錯乱のうちに未来を予言する者まで現れた。病気から回復した者もいたと言う。これがコンヴェルシオネール（痙攣派）の奇蹟と呼ばれる。パリ大司教の命令では閉鎖されるが，この奇蹟への関心はこの時代を通じて残っていくことになる。後者は通常の暴動事件ではない。1750 年にパリ民衆の間で，自分たちの子供たちが官憲により不当に検挙されているという漠然とした噂から起こったものである。民衆は官憲の関連施設

の破壊活動を行っていった。そして街で囁かれる噂の中には，不治の病に冒された貴婦人がすがる最後の秘薬として子供の生き血があり，そのために子供が誘拐されるのだというものさえあった[9)]。事件から窺えるのは，決してこの時代が不合理的なものから解放されたわけではないということである。もちろん，非論理的な偏見にこの時代が支配されていたということではないし，実際にルソーは根拠のない宗教的な熱狂状態を批判してさえいる[10)]。重要なことはこうした暗黒部分を除外せず，時代を読みとっていこうとする態度であろう。ルソーが非合理に屈したというのではない。彼が時代のもつ複合性を踏まえたうえで，著作活動を行っていったことを最初に確認しておかねばならないだろう。そうした手続きを経たうえで彼の提示するビジョンを検討していくべきだろう。では，ルソーのビジョンにおいて重要な位置を占めるダミヤン事件とはいかなるものであったのだろうか。

2-3．ダミヤン事件

ダミヤン事件が起こる直前のフランス社会は安定しているとは言い難い状態にあった。すでに見たように，その不安定さは1750年の暴動事件にも現れている。不合理な噂を加速させる要因としては，フランス経済の悪化，重税の圧迫，ポンパドゥール一派の専横への嫌悪などが挙げられよう。そしてさらにその背後には，そうした事態の悪化を阻止できぬルイ15世の無策ぶりにたいする不満がある。

そこには父たるべき存在にたいする不満がある。王とは人民にとっては，象徴的な意味での父なのである。確かに以前のような「癒しの王」という宗教的な特権性は薄れていくものの，この至高者の力は大きいものがあった。家族をまとめるべき者が，ポンパドゥール夫人との関係などを通じて性的な面でも秩序壊乱者たる色彩を強めていくことにも人々の批判があり，その言行とフランスの国家的不安定状態が結びつけられ，王は諸悪の元凶として信頼を失っていくことになる。

事件は1757年ダミヤンがヴェルサイユにおいて王を短刀で刺すことによって始まる。王は幸い一命を取り留めるが，しばらくは病床に伏すことになる。この事件で注目すべきは，その動機および経過そしてこの出来事が明らかにした構造であろう。犯人ダミヤンはただ王の殺害を企てたのではない。彼の記す

ところによれば，襲撃はひとつの警告だというのである。その目的は王をただ亡き者にするのではなく，王にたいして取るべき方策を進言することであった。そこに，秩序に携わるべき者である王を，逸脱から本道へと引き戻そうとする意志を読みとることが許されるのではないだろうか[11)]。

ここで問題となるのは「家族の再生」であろう。「父の帰還」ともいえるかもしれない。本来あるべき位置から逸脱した「父」なる存在に当然占めるべき場所へと回帰することを促す動きがある。父性的存在への呼びかけは事件を通じてその底流を流れている。それは間接的には，父が形づくる家庭という枠組みを妨害するかにみえるポンパドゥール夫人への批判ともなる。王がこの女性にいいように引き回されている感があるからである[12)]。

言い換えれば，この事件は秩序回復のためのひとつの機会ともなりうるものであった。実際，事件後それまで王ないし王権にたいして距離を置いていた高等法院のグループも主君の回復をひたすら望むような動きをみせる。君主の回復とともに，フランス全体の再生が可能になるかとも思われる雰囲気があった。各地で王の快癒を願う宗教的な儀式が催され，またそれを報道するメディアもその量があまりに多いために，ある種の規制を施すほどであった。ただし国全体を覆うこの壮大な賭けは残念ながら，最終的には王に取って有利に展開することはなかった。この巻き返しに失敗したルイ15世は以後その威容を失っていくことだろう。こうして父なるものによる秩序回復の試みの物語は大団円を迎えることなく，ダミヤンの死とともに忘れられていくのである[13)]。

2－4．語りの構造

妄想に沈むルソーと王権をめぐる事件とでは，重なる点は一見したところ何もないように思われる。しかしダミヤン事件を契機として語られた言説を見ていきながら，その特徴を指摘してみることにしよう。

第1にこの事件には，ある種の解釈の力学が働いていくことがあげられる。ダミヤンは当初から単独犯とはみなされない。彼の共犯者なるものが想定され，その犯人探しがダミヤン自身の否認にもかかわらず追求される。共犯者グループを想定することで，この出来事が決して刹那的な犯行ではなく，計画にもとづいて行われたものとみなすのである。その見通しのもとに，パリ中の不審とみなされる人々が捜査の対象として浮上する。王に敵意を抱きそうな要素

がここにおいて，人々の脳裏に浮かびだしていく。闇に潜む悪の組織を暴き出すという欲望がそこにはある。うごめく不審者たちの行動の背後に隠れる悪しき意図を読み取っていこうというのである[14]。

言い換えれば，陰謀という概念によって，事件を説明しようとすることに他ならない。王を手にかけるなどということが，一個人の考えつくものではない。そこには周到に計画されてきた動きがあるはずであり，またそうした恐ろしい行動を組織してきた悪のネットワークが存在するというビジョンである。事件の真相がはっきりしないだけに，人々は各自疑惑を強めていき，その疑いを通じて事件を読みとろうとする欲望を強めていくのである。今やあらゆる事象が読みとりの対象となる。怪しい男はいなかったか，不審な言動が聞かれはしなかったか，事件に関係のあるような疑惑に満ちた動きはなかったかが調査されていく――

〔…〕悪夢のような雰囲気の中で，陰謀という妄想がどれほど広まっていったかがわかる。ダミヤン事件はしばしの間，王殺しという抑圧された幻想を解放し，明らかにするのである。[15]

こうした姿勢は，この事件にかんして書かれた時事的な書物においても共通してみられる展望である――

まず第一にこの王殺害計画犯に共犯者がいるということは，その手口からみても明らかなことである。[16]

王の体に刃を突き立てたこの男がただ独りで，恐ろしいことを吹き込まれずに，そんな行為を行ったとは信じがたいことである。[17]

そしてそれが大きな謎に包まれているというイメージが現れている。証拠なども隠されていくというのである――

パリの人々の噂では，手がかりになったようなことが，すべて隠されるようにという手配がなされたいうのである。[18]
ダミヤンが真犯人のことを白状しても，誰もそれを知ろうとはしないだろう。[19]

陰謀の手がかりが見えなくなっていけばいくほど，事件の真相にまでいたる道を辿る

のがますます難しくなるだろう。[20]

結局のところ，悪のネットワークの真の姿は明らかとなることはない。その究明に至ることはなく，ダミヤンは死刑に処せられるのである。真相は歴史の闇の中に消えていく。ただ事件に関する言説は，証拠の不在の前で沈黙することはない。謎の組織の仮説を展開するのである。そこで登場するものの中にイエズス会の姿がある。実際事件直後には，イエズス会が張本人だという噂が流れ始めている[21]。そうした噂の背景のひとつには，ダミヤンがかつてイエズス会の下で働いていたという事実も関係あると思われる。ただそれにもましてこの組織が疑惑をもたれたのは，その宗教結社が権力上層部に隠然たる影響力を与えているという印象であった。地位の上位にある人々の心をすでに捉えており，彼らを思いのままに動かすことができると思われていた。王すらもその一派の誘惑にかかっているという見方すらあった[22]。そうした中で事件の真相をめぐる探求は，残された手がかりからこの組織の悪の荷担を示すような証拠を見つけることでもあった――

> しかし，もしこの事件をめぐる捜査からこの犯人と神父たちの結託の印が見つかれば，その手がかりをとことん調べて，この事件における神父たちの共犯関係をはっきりさせ，国民の目の前でその関係を示して人々全部がこの組織を憎むようにすることができるのではないだろうか。ただ心得ておこう，イエズス会の力は非常に強力であるので，そう簡単に彼らを動揺させられないだろう……。[23]

ここには闇と光の戦いがある。世界を広く覆っていこうとする悪のネットワークに対し，その存在を白日の下に晒し，進行をくい止めなければいけないのである。ただ追跡はこの組織の狡猾さにより，容易ではない。しかし，その戦いの成否に将来がかかっているだけに，闘争を避けるわけにはいかない。秘密のうちに進んでいく闇との困難な抗争が展開する。ただこうした戦いこそ，ルソーが『対話』などで展開した試みに他ならないのではないだろうか。人々がルソーの妄想として，嘆き，あきれた異常なビジョンはすでに，この時期に人々の間で共有されていたのではないだろうか。今や，ルソーの病的とされる見取り図を検討しながら，その構造とダミヤン事件を解釈するうえで人々の用いた思考の枠組みと比較するという作業が残されている。

註

1）*Correspondance complète*, éd. R. A. LEIGH, Genève: Droz, t. IV [1967], p. 32.
2）*Ibid.*, t. V [1967], p. 249
3）*Correspondance littéraire*, t. IV [1878], Paris: Garnier Frères, p. 54.
4）MARMONTEL, *Mémoires*, Paris: Librairie des Bibliophiles, 3 vol., 1861, t. II, p. 190.
5）メルシエ『18 世紀パリ生活誌』，岩波書店，1989 年，下巻 141 頁。
6）こうしたルソーの解釈については，主として以下を参照―― *Œuvres complètes de Jean–Jacques Rousseau*, Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 5 vol., t. I [1959], p. 608, note 1 ; *Correspondance complète*, op. cit., t. XXXVIII [1981], pp. 137–143.
7）*Œuvres complètes de Jean–Jacques Rousseau*, op. cit., t. I. p. 996, note 2.
8）こうした傾向にかんする最近の研究については以下を参照―― Monique COTTRET, *Jansénisme et Lumières. Pour un autre XVIIIe siècle*, Paris: Albin Michel, 1998; Catherine MARIE, *De la cause de Dieu à la cause de la Nation. Le jansénisme au XVIIIe siècle*, Paris: Gallimard, 1998; Didier MASSEAU, *Les ennemis des philosophes. L'antiphilosophie au temps des Lumières*, Paris: Albin Michel, 2000.
9）この暴動については以下を参照―― Arlette FARGE et Jacques REVEL, *Logiques de la foule*, Paris: Hachette, 1988. また，貴婦人のエピソードについては以下を参照―― Jacques–Louis MÉNÉTRA, *Journal de ma vie*, Paris: Albin Michel, 1988.
10）『ルソー全集』，白水社，第 8 巻，1979 年，258 頁。
11）Jean VIGUERIE, *Histoire et dictionnaire du temps des Lumières*, Paris: Robert Laffont, 1995, pp. 194–195.
12）この事件における家族というモデルの重要性については，以下を参照―― Pierre RÉTAT (dir.), *L'attentat de Damiens. Discours sur l'événement au XVIIIe siècle*, Lyon: Presses Universitaires de Lyon, 1979, p. 132.
13）*Ibid.*, pp. 112–116.
14）*Ibid.*, pp. 87–88.
15）*Ibid.*, p. 87.
16）*Le Patriote, ou Anecdotes secrètes sur l'assassinat de Sa Majesté, le Roy de France; commis par le détestable Damien, avec des Réflexions à la fin* [abrégé ensuite: *Patriote*], à Kim–Te–Tchim, 1759, p. 17.
17）*Réflexions sur l'attentat commis le* 5 *janvier contre la vie du Roi* [abrégé ensuite: *Réflexions*], 1759, p. 35.
18）*Patriote*, p. 50.

19) *Ibid.*, pp. 74–75.
20) *Réflexions*, op. cit., p. 31.
21) François Ravaisson, *Archives de Bastille. Documents inédits recueillis et publiés*, Paris: A. Durand et Pedone–Lauriel, t. XVI, 1884, p. 427.
22) *Patriote*, p. 63.
23) *Réflexions*, pp. 25–26.